玉蜀黍（小説）[[1]](#footnote-1)

元山の町と松濤園海水浴場との間に松のこんもりと茂つた山の突端があつて、そこに安と云ふ一奇人が住んで居る。安氏と私とは數十年来の知合ではあるが繁く交際する程の間柄ではなかつた。今年の夏私は松濤園の濱でひよつくり安氏と邂逅して、私の小供達と一緒に安氏宅へ晩餐に呼ばれることゝなつた。

　「玉蜀黍しかありませぬが」

と云ふのが安氏の招待の辭であつたのだ。

約束の午後五時安氏は私達を迎へに來られた。招ばれた客は滿洲國の綽名を持つた羅氏夫婦と、その小供達と、そして私達であつた。羅氏と私とは舊友であり又家庭的友人でもある。

安氏の住宅は誠に風景絶佳で東の窓からは元山の海が一眸に攬められる。しかも庭に捧樫や老櫻や松等が鬱蒼と蔭をなして居るのだ。

「これは朝鮮一ですな」

と私は思はず叫んだが決して溢美の言ではないと思ふ。

　「矢張西洋人の方が本場の朝鮮人よりも風水にも明るい」と云ふのは羅氏の評であつた。風水とは家相や墓相を觀る術のことであると云ふ譯は此の家は今を距る十年許り前に舊韓國の海關吏として元山に來たオイセンと云ふ丁抹貴族が建てたので當主の安氏はそのオイセン氏から之を讓り受けたのである。日當りはよし風景は好し、而も西北は山に圍まれて居る絶好の「明堂」なのである。

　安氏は私と始めて知り合ふ時分には未だ貧書生であつた。彼はシベリヤに往つたり滿洲に行つたりしたもので羅氏と近附きになつたの浦鹽放浪の時ださうである。羅氏も若い時分は思想的にも空間的にも又事業惕にも放浪者で數十萬の富を戰ひ取る様になつたのはつひ近年のことであるが安氏も今は富優に百萬を超えるのださうである。安氏も羅氏も齢今や五十、功成つた部類であらう。只昔も今も變らぬ貧書生で頑張るのは此の私だけである。

　たわいもない若い時分の思出話等に時は流れて食事の時問となつた。マホガニー材かは知らぬが立派な食卓に雪白のクロースが掛けられて居り椅子や調度等も何れも時代めいた上品さがある。料理は賢夫人の名ある安夫人が手づから調理したものださうで自身給仕をして居られた。

　最初に出たのが西洋皿に盛つた黄金色の粥である。

　「玉蜀黍です。玉蜀黍のお粥ですよ。さあどうぞ」

と安氏が先づスプーンに取つて一口食べた。私も食べて見たが本當においしかつた。これはホテル等でも食卓に上るものであるが玉蜀黍が新しいためでもあらう、ホテルの物より比べものにならない程美味あつた。

　「これは旨い」

と羅氏も舌鼓を打つた。

　「一體これは何う云ふ風に作るんです！」

私は安氏に訊いた。

「何に譯もないですよ。玉蜀黍の實を取つて摺りつぶすんですな。それから程よく煑てクリームと鹽を少し加へるんです。尤もこれには雞の出しが少し入れてある様ですがね。」

　「砂糖は加へぬのですか」

と云ふのは羅氏夫人であつた。

　「イゝエ。砂糖は這入つて居ませぬ。」

と云ふ安夫人の答を承けて、安氏は

　「内では成るべく砂糖は使はない方針なんです。朝鮮では砂糖は出來ないし、尚更自分では作れませぬので。それに何んな穀物にもちやんと適宜の量に糖分が這入つて居ますからな。調理の方法さへ宜しければ特に砂糖を加へぬでも好いと思ひます。」

　「神様の處方通りにする譯ですな」

　羅氏は愉快さう[に]笑つた。

　「左様。神様の處方に間違はないのです」

　安氏は笑ひもせす眞面目に云つた。

　第二のコースは雞をローストしたものでそれと同時にパンやクツキーが出たが安氏はクツキーを手に取つて示しながら、

　「これも玉蜀黍です。パンも玉蜀黍や蕎麥でゞも出來るが麥類は朝鮮でも出來るから問題はありませぬ。而し玉蜀黍は何んな山の中でも出來ますからね。ライ麥等もさうですが、玉蜀黍を常食にすることが朝鮮の食糧問題解決に對して重要な意味があると思ひますので、私は二十年來玉蜀黍を美味しく食べる工夫をして居るのです。このクツキーも玉蜀黍で拵へたのですが、一つ召上つて下さい」

と云ふのであつた。

「成程美味しいですな。」

「うむ、これは旨い！」

「僕にももう一つ」

大人も小供も大歡迎であつた。

次に出たのは煎餅様のもので安氏は又、

「これも玉蜀黍です」

と云つて莞爾と笑つて見せた。

それも美味しかつた。

次に出たのは玉蜀黍をその儘蒸したものであつたが安氏は、

「今までお上りになつた玉蜀黍は是です。是はゴールデンバンダムと云ふアメリカ種ですが朝鮮の氣候風土にも能く合ふ様です。さあ今度は原料の儘の玉蜀黍を召上つて御覧なさい」

と勸めた。

本當に美味しかつた。柔かで甘味があつてそれに云ふに云はれない風味があつた。

小供達は喋るのも忘れて貪つて居た。食慾の少ない私の男の子もゴールデンバンダムに武者振り附いて居た。

「こんなに玉蜀黍を食べても腹を壊はしませぬか」

と私が心配さうに訊いたら安氏は落着いて、

「いゝえ、そんな心配はありませぬ。喰ひ過ぎさへしなければ大丈夫です。食卓で尾籠な話ですが玉蜀黍を食べると通じが好いですな。下痢を起す等云つて居るけれどもそんなことはありませぬ。病氣になるのは食過ぎのためですな。」

それからトマトが出る。新しいバターやチーズや野菜も種々出たのであるが凡べて庭先の畑や牧場で手づから作つたもので、お金を出して買ひ入れたのは鹽と砂糖だけださうである。

次に黑色の飲物が出たが私はてつきり葡萄汁と思つて飲んで了つた。

「李様如何です、今の飲物は！」

と安氏は私に向つて笑顔を作つた。

「好いですな。葡萄ぢやありませぬか」

私は怪訝な顔付で安氏を見返へした。

「僕もグレープジュースだと思つたが」

羅氏も私と同様なことを云つた。

「皆さんはさう思ふらしい。が是は葡萄ぢやありませぬ[。]或種の草の實です。」

「野生ですか！」

「まあ野生と同様ですが西洋から來たものです。播き放して置けば好いんです。」

安氏はその草の名を聞かして呉れたが私はそれを忘れて了つたのが遺憾である。何時か訊いて見ようかと思つて居る。

最後に出たのは果物と黑つぽい熱い飲物とそれからケイキ様の物であつた。

「これは又何んだらう。コーヒーやココアではない筈だからな」

と羅氏は笑ひながらコツプを口に付けて見て、

「あ、ボースタムか。流石の安さんもこれだけは舶來ですな」

と大聲で云つた。丸で勝利の叫びとでも云ひさうである。

「違ひますよ羅様」

と安氏は愉快さうに笑つた。

「では伺んです！」

羅氏は口惜しさうだつた。

「これも玉蜀黍ですか」

と私は冗談の積りで云つた。

「さうです。これも玉蜀黍です。玉蜀黍をこがして粉にしたものです。それに或種の草が少し這入つて居るんです、この薫りですな。」

安氏はつゝましやかに云つたが矢張り勝誇つた喜びを包み隱すことは出來なかつた。

「さうか。これも矢張玉蜀黍か」

羅氏は之も無念さうに降參したのである。

「あ、さう、さう」

と安氏は夫人を顧みて、

「御飯を少し差上げませうか、何うも東洋人は御飯を食べないと食事をした氣にならないのだが」

と云つて意味ありそうに私達を見廻はした。

「いやいや、もう澤山です。、もう何も食べられませぬ」

と私が逃げたら、安氏は

「それでもほんの少しばかり」

と云つて夫人に御飯を運ぶことを諜めしてからこう云つた。

「私はこう思ふのです。半食は平原住民の常食とすべきもので朝鮮の様な山岳の多い所では畑や山で出來るものを常食としなければならないと[。]　こう思ふのです。平原の面積は殖えぬのに人口はどんどん殖える。それなのに一日三度白米計り食べようと云ふのは無理です。そこで私は何んとかして山で作り得る食糧とそれを美味しく食べる方法とを研究し度い、そして私自身家庭で實行したいと思ひ立つたのです。それは私が羅さんと浦鹽で別れて吉林省や咸鏡南北道を跋渉して感じたことですが實に廣大な山野が利用されずに居る。

若し山で作られる食糧とそれを美味しく食べる調理法とが發見されたら朝鮮は今の人口の何倍をも養ふことが出來るだらうと[感]じたのでした。それで眼を附けたのが馬鈴薯と玉蜀黍と麥類、粟類でした。所が御承知の如く私の様な貧書生では何も思ふ様に行かないし、今やつと玉蜀黍の栽培法と調理法だけは何うにかかうにか眼鼻が付きましたので之からは馬鈴薯に取りかゝらうとして居る所です。さあどうぞ、失禮しました、餘り長く喋つて、どうぞ玉蜀黍のポースタムですか、羅さんがポースタムとおつしやつたからそれで好いとして。それから是れが、このケイキが馬鈴薯で造つたものです」

と云つて自分が先に馬鈴薯のケイキを一口食べては玉蜀黍のポースタムを飲んだ。

私達も安氏に倣つた。ポースタムもケイキも美味しかつた。

食後私達は海に面してべランダぢやないが廣い[緣]側の様になつて居る所に座を移して夜の海を眺めながら色々と語つた。その主題は山の開拓であつた。玉蜀黍や馬鈴薯や麥類の栽培と牛、羊、豚等の牧畜は朝鮮のこれからの農業の新天地でなければならず同時に又主なるものでならなければならないと云ふことであつた。

「田や畑を改良することも急務であるが山を開拓するのは創造ですからね。子孫萬代食べられる食糧の新しい源泉を作ることですよ」

こう云ふ安氏の眼は輝いて居た。

小供達が居るので九時頃安氏宅を出たが別れに臨み安氏は、

「何時か又馬鈴薯の晩餐を差し上げませう」

[と]云つて手を差し延べた。（1939.11）

1. 1939年11月号『總動員』 [↑](#footnote-ref-1)